

『少女画報』の投稿欄分析による読者と編集者の関係性の変容

水田 健斗

(鍛冶 宏介ゼミ)

目次

- 一章 主題の確認と分析方法
 - 一節 本稿の目的及び先行研究
 - 二節 分析方法の確認
- 二章 『少女画報』の編集方針と社会的背景
 - 一節 当時の学校教育の実情
 - 二節 価格設定
 - 三節 創刊号にみる編集方針
- 三章 『少女画報』の歴史の変遷
 - 一節 総頁数の推移
 - 二節 創刊時の投書欄と規定
 - 三節 読者投稿欄における歴史の変遷
 - ① 「読者と記者」期
 - ② 「読者くらぶ」期
 - ③ 「サン・ルーム」期
 - ④ 「新体制」期
- 四章 結びに代えて

一章 主題の確認と分析方法

一節 本稿の目的及び先行研究

本稿は明治から昭和にかけて刊行された雑誌『少女画報』（東京社）を対象とし、誌面内容の分析とその歴史の変遷を、読者投稿欄における読者間および読者編集者間のコミュニケーションから明らかにすることを目指す。またそうした歴史の変遷の結果、『少女画報』がどういった最期を迎えたかについても検討していくことを目的としている。

近代日本の少女雑誌の読者投稿欄において、読者間および読者と編集者間で投書を通じて親密な関係が構築されていたことは多くの先行研究で指摘されている。今田絵里香は、読者である少女たちが少女雑誌の提示する「少女」という表象をどう受け入れていったのかを明らかにし、『少女』という集合表象を核にして雑誌上にコミュニティを形成し、雑誌の外に広がる広範なネットワークを構築することができた（今田「二〇〇七」一二九頁）ことを検証した。また本田和子は少女雑誌の投稿欄上から「投稿文を通じて全国に広がっていたのはペンネームという『虚ろなるもの』のネットワークだった」（本田「二〇一二」一三六頁）として「少女幻想共同体」の存在を論じている。さらに川村邦光は少女雑誌上には読者たちによって構築された「（オトメ共同体）」という「想像の共同体」（川村「一九九三」一一一頁）が存在していたことを明らかにした。そして、裕夕記は戦時中において、「読者投稿欄という少女たちの交流の場は、少女たちの愛国的精神を高揚する場と変化」（裕「二〇〇二」）していったことを『少女の友』の投稿欄分析によって明らかにした。他にも少女雑誌を対象とした投稿

欄研究はいくつも存在する。

こうした数多くの少女雑誌の読者投稿欄を対象とした先行研究が存在する中、『少女画報』の投稿欄については未だ十分に分析されているとは言いがたい状況であると考える。そこで本稿では『少女画報』の読者投稿欄のとりわけ「読者と記者」欄に焦点を当て、投稿欄上で読者間および読者編集者間においてどういったコミュニケーションを行なわれていたかについて明らかにすると同時に、終刊までの経緯についても検証していきたい。

『少女画報』は一九二二(明治四十五)年に創刊された少女雑誌である。発行は東京社である。その後一九三一(昭和六)年に新泉社に発行元が変更になりながらも、一九四二(昭和十七)年の雑誌統合令により『少女の友』(実業之日本社)に統合され廃刊するまでのおよそ三〇年間刊行を続けた。創刊当時の編集主筆は高橋我川。編集顧問は高島平三郎と倉橋惣三で、それぞれ創刊号に「少女と新年」、「少女画報」の読み方」として文章を寄稿している。編集者として、東京社を設立した鷹見久太郎の名が載っている。また『少女画報』は、児童文学研究において少女小説の起源とされる吉屋信子の『花物語』がはじめて掲載された雑誌として歴史的価値が高い。『少女画報』を分析することは、大正期以降にみられる少女雑誌の多様化と大衆化に伴う読者層や市場の変動のメカニズム解明のためにも重要な作業であると考ええる。

本稿では、まず第二章において『少女画報』の編集方針と理想とする雑誌像について整理したうえで、第三章にて実際の歴史的経緯を辿り、読者投稿欄における読者間および読者編集者間のコミュニケーションの実情を明らかにする。それらをふまえて、第四章では『少女画報』の隆盛と衰退について検討し論をまとめる。

二節 分析方法の確認

本稿で分析する時期は、創刊号である一九二二(明治四十五)年一月号から一九四二(昭和十七)年一月号まで。使用した号についての説明と注意点について明記しておく。なお分析には大阪国際児童文学館に所蔵されている号を使用したため、所蔵されていない号や過度な欠損の見

受けられる号は本稿では分析の対象外としている。

第二章では創刊号である一九二二(明治四十五)年一月号の紙面構成についての分析を行った。また一九二二(明治四十五)年から一九四二(昭和十七)年までの各年一月号の総頁数の変化をまとめた。なお、一九一八(大正七)年と一九二〇(大正九)年は破れによって数頁データに誤りがある可能性があるが、結果に大きな支障をきたさないと考えられるため、今回は現存する頁数で検証を行った。また大阪国際児童文学館に一月号が所蔵していなかった年は、最も一月号に近い月の号を選んだ。そのため一九二七(昭和二年)、一九三六(昭和十一年)は四月号、一九三一(昭和六)年は三月号の総頁数とした。第三章では一九二二(明治四十五)年から五年ごとを基準にその読者投稿欄の分析を行った。したがって一九二二(明治四十五)年、一九一七(大正六)年、一九二二(大正十一年)年、一九二七(昭和二年)、一九三二(昭和七)年、一九三七(昭和十二年)年、一九四二(昭和十七)年である。加えて、これらの前年や翌年の号にも目を通しより詳しい分析を試みている。

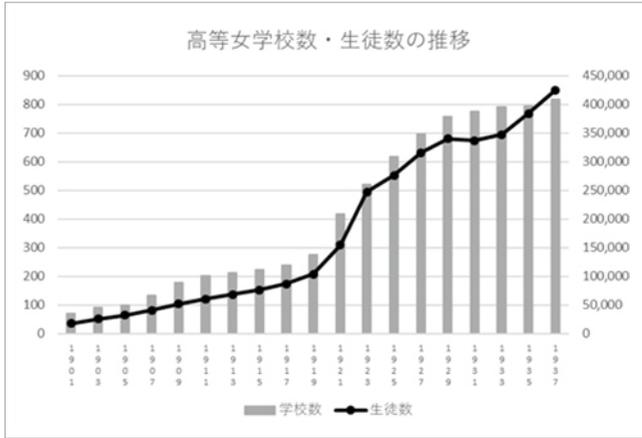
第二章 『少女画報』の編集方針と社会的背景

一節 当時の学校教育の実状

今田絵里香によると「一八九九(明治三十二年)の高等女学校令以降、高等女学校数と女学生人口の増加によって、各出版社は女学生を読者対象にしてこれまでの子ども雑誌を男子向け女子向けに分化させた」(今田「二〇〇七」十二頁)という。これにより誕生したのが少年雑誌と少女雑誌という区分である。日本で初めての少女雑誌は一九〇二(明治三十五年)年四月に創刊された金港堂書籍の『少女界』とされている。その後「少女」の名を表題に冠する雑誌が次々に創刊。『少女画報』もそのうちのひとつだ。改めて、少女雑誌が創刊された一九〇〇年代以降の学校教育の実情について、国立教育政策研究所「我が国の学校教育制度の歴史について(学制百年史等により)」(二〇一一)から一部引用しながらまとめることにする。

一八八六（明治十九）年制定の第一次小学校令によって尋常小学校修了までの四年以内が義務教育期間となる。その後一九〇〇（明治三十三年）には第三次小学校令が制定され、小学校は無償化される。一八九九（明治三十二年）年ごろにおける進学先としての中学校相当施設は①男子の高等普通教育（中学校・五年制）、②女子の高等普通教育（高等女学校・四年制）、③実業教育（実業高校・三年制）の三つであった。一九一七（大正六）年、内閣総理大臣の諮問機関として臨時教育会議を設置。第一次世界大戦に伴う社会情勢及び国民生活の変化を受け、これに即応する教育の改革について審議・提案がなされ、これに基づき中学校以上の改革と拡充が急速に進展する。こうした教育制度の充実とともに女子小学生、女学生人口は爆発的に増えていく。表1は一九〇一（明治三十四）年から一九三七（昭和十二）年までの高等女学校数・生徒数の推移をまとめたものをグラフにしたものである。（今田「二〇〇六」六十八頁）これを見ると一九〇〇年代は学校数、生徒数ともに増加の一途をたどったことがわかる。特に一九〇一（明治三十四）年から一九二二（大正十一年）の二〇年間に大きく増加し、臨時教育会議が設置された一九一七（大正六）年以降の急速な発展が見られる。

表1 高等女学校数・生徒数の推移
 ※『文部省年表』各年度より作成
 ※今田絵里香『少女』の社会史』(2006) 68 頁よりデータを引用



一八八六（明治十九）年制定の第一次小学校令によって尋常小学校修了までの四年以内が義務教育期間となる。その後一九〇〇（明治三十三年）には第三次小学校令が制定され、小学校は無償化される。一八九九（明治三十二年）年ごろにおける進学先としての中学校相当施設は①男子の高等普通教育（中学校・五年制）、②女子の高等普通教育（高等女学校・四年制）、③実業教育（実業高校・三年制）の三つであった。一九一七（大正六）年、内閣総理大臣の諮問機関として臨時教育会議を設置。第一次世界大戦に伴う社会情勢及び国民生活の変化を受け、これに即応する教育の改革について審議・提案がなされ、これに基づき中学校以上の改革と拡充が急速に進展する。こうした教育制度の充実とともに女子小学生、女学生人口は爆発的に増えていく。表1は一九〇一（明治三十四）年から一九三七（昭和十二）年までの高等女学校数・生徒数の推移をまとめたものをグラフにしたものである。（今田「二〇〇六」六十八頁）これを見ると一九〇〇年代は学校数、生徒数ともに増加の一途をたどったことがわかる。特に一九〇一（明治三十四）年から一九二二（大正十一年）の二〇年間に大きく増加し、臨時教育会議が設置された一九一七（大正六）年以降の急速な発展が見られる。

表2 創刊号裏表紙に記載されている
 広告費一覧表

等級	壹頁	半頁	四半頁
特等	四〇・〇〇〇	・	・
壹等	三五・〇〇〇	一九・〇〇〇	・
式等	三〇・〇〇〇	一六・〇〇〇	九・〇〇〇
參等	二五・〇〇〇	一三・〇〇〇	七・五〇〇

企業物価指数（戦前物価指数）
 $7106 \text{ (平成三〇年)} \div 0.646 \text{ (明治四十五年)} = 1,100$
 \downarrow 一円あたり約一一〇〇円
 広告費は「特等壹頁」であっても今の四四〇〇〇円ほどと比較的安価であったと考えられる。

やはり少女雑誌の増加の背景にはその主な読者である高等女学生の増加が要因のひとつであると考えて間違いまいだろう。

二節 価格設定
 創刊号本誌の記載によると定価は金拾五銭。広告費は最も高額なものが「特等壹頁」の「四拾圓」。最も安価なものが「參等四頁半」の「七円五拾銭」となり種類は九種類と幅広く受け付けていたことがわかる（表2）。定価金拾五銭の現在の価値について一九二二（明治四十五年）における一銭の価値を特定することが難しかったため、おおまかな価値の予測を立てる。日本銀行のHPに掲載されている物価指数の表から一九二二（明治四十五年）年の物価が現代（二〇一八（平成三〇）年）の何倍なのかを算出した。ただし、一九二二（明治四十五年）年は企業物価指数（戦前物価指数）の値しかなかったため、消費者物価指数とは異なる値となる。^{（注1）}

三節 創刊号にみる編集方針

『少女画報』が目指したのはどのような雑誌だったのか。創刊号本誌三頁には「発刊のことば」が掲載されている。少し長いが抜粋する。^(注2)

発刊のことば

私は「少女畫報」と申し、今年から少女さん方のお友達として生れました。今後は何分宜しくお交際を願います。
私は是から皆さんに毎月美しい畫をお目につけて、面白いお話を聞かせ申ませう。美しいと申しても唯見て美しいばかりでなく、面白いと申しても唯聞いて面白ければかりではありません。其中には種々様々な善い事が含んでいるのであります。
皆さんは始終私と交際つてゐらつしやれば、何時も美しい、清い、氣高い、面白い、快活な少女であることが出来ます。私はまた皆さんを何時も美しい、清い、氣高い、面白い、快活な少女となる事の出来るやうに努めて居ります。斯く申せば私は皆さんの先生のやうですけれど、実は仲の良い同級のお友達です。お友達の中の益友です。ともに善く學びませう。而してともに善く遊びませう。何時までも。何時までも仲良く。睦まじく。

「発刊のことば」は編集部による発刊にあたっての方針と考えることができる。「発刊のことば」から読みとることができるのは、編集者たちは『少女画報』が教育的・啓蒙的機能を持つことを意識していたと思われることである。また「読者と記者」(後述)なる投書欄を作り、読者の質問等に答えたり、「編輯便り」にて編集者たちの日常風景や人物像を紹介していたり、彼らの視点や立場を読者である少女たちに寄り添うよう意識していたように見られる。

編集部の人々について創刊号「編輯便り」からわかる事をまとめる。主筆の高橋我川、有田暁華、小池星影、枝元枝風、鷹見思水(本名・鷹見久太郎)の五人に加え、女の記者が2、3人いるとの記載がある。また高橋我川、有田暁華、小池星影の三人は容姿の特徴や好きなものなど

そのパーソナリティについても言及されている。本稿では主筆・高橋我川のもののみ抜粋する。

まづ、高橋我川の一歩目につくは、其少し曲がつた前屈みの肩と、それから天狗様のお孫さんではあるまいかと思はるゝ高い鼻です。この人が眼鏡を取って、卓子に對つて何か書いている時、ソツト其眼鏡を隠すと丸い眼を三角にして大騒ぎをします。この人の一番好きなものは金鐙で、五つ六つ、七つ八つ、見る見る山が崩れます。一寸見れば老爺の様で、よく見れば若い人です。

こうした編集部の人々のキャラクター付けによつて彼らは少女たちに人気であった。実際、読者投稿欄上では彼らの写真が見たいという投書が後を絶たなかつた。こうした作り手の印象は読者である少女たちにとらなる購入意欲や投稿意欲を掻き立てたのではないかと考えている。

創刊号の巻頭に掲載されているグラビア写真から編集部が読者へ推奨したコンテンツを検証する。以下が創刊号巻頭の掲載写真の一覧である。

子の新年

久爾の宮三如女王殿下

梨本の宮二女王殿下

松上の鶴

お正月の遊び(二) お手玉と双六

お正月の遊び(一) 羽根つきと鞠つき

お正月の遊び(三) 歌がるたと福引

睦まじき兄弟

梅の香と薔薇の色

春の曲

小鳥籠

おとづれ(訪問)

園藝

午前と午後(登校と帰宅)

裁縫と挿花

休憩時間

お辨當

学校の前(一)

運動場

遊戯と體操

可愛らしき運動會

特殊小學校

動物園だより

懸賞手振の色いろ

これらを大きく三つに分類した。①「子の新年」から「久爾の宮三如女王殿下」「梨本の宮二女王殿下」を除いて「お正月の遊び」までは一月号として正月を意識したものである。②「睦まじき兄弟」から「小鳥籠」までは所謂「女子を連想させるものや可愛らしいもの」である。③残りの「おとづれ(訪問)」から「特殊小學校」までは学校や教育を意識させるものである。

「久爾の宮三如女王殿下」「梨本の宮二女王殿下」の掲載は編集部としての読者の理想としてはしい少女像であったと思われる。これに関して今田絵里香は「一九〇八(明治四十二)年から一九一三(大正二年)頃まで『少女の友』『少女画報』が取り上げた理想的な女性像は、皇族・華族の女性と教育者・学者などのエリート女性であった」(今田「二〇〇七」一二九頁)と分析しているが、少なくとも『少女画報』にとって最も理想とした女性像は皇族・華族である二人であったと言えそうだ。②の写真たちにはそれぞれ少女が



図1 1912年1月号より
「睦まじき兄弟」^{はらから}、「梅の香と薔薇の色」

写っており(図1)、これらの事物と少女は関係が深く、少女を印象させるものとして読者に認識させる役割を担っていると考えられる。もしくは、社会の求める少女像に合わせたアイテムを掲載しているという見方もできる。そういった少女像は『少女画報』を含む多くの少女雑誌によって相互的に補充され、強固になっていくものと推測される。③の写真たちは『少女画報』が学生をメインターゲットに据えている証拠であり、また読者にとつての日常風景であると思われる。これらの写真たちにはそれぞれ写真の横にどの学校の生徒であるかが記載されており、「園藝」から「お辨當」までは女学校の様子が、「学校の前(一)」から「特殊小學校」までは尋常小學校の様子が掲載されている。このことから、『少女画報』のメインとしたターゲット層は尋常小學校に通う子供たちから女學校に通う女学生までであると考えられる。「動物園だより」は「白狐」「豪猪」「エーデル鹿」の写真であり、上野動物園に新しく到着した珍しい動物であるとの説明がある。「懸賞手振の色いろ」は写真を使った読者投書による懸賞のようで、説明として「これは、或るお嬢さんの手振の色ぐです。何をして居る時に斯様な手付をするのでせうか、皆さん當て、御覽なさい。(中略)よく當たつた方には商品を差上げます。メ切は五日。次號には實際の所を御覽に入れます。」と書いてあり、文才や教養が乏しくとも懸賞に参加することのできる誌面作りを目指していた可能性が考えられる。東京社には『婦人画報』が存在したことから、あくまでも読者は女学生以下の低年齢層として、尋常小學校入学前の児童も対象にしていたと考えられるだろう。

三章 『少女画報』の歴史の変遷

一節 総頁数の変化

『少女画報』の創刊年である一九二二(明治四十五)年から終刊年である一九四二(昭和十七)年までの各年一月号の総頁数の変化をまとめた。「表3」なお、一九一八(大正七)年と一九二〇(大正九)年は破れによって数頁データに誤りがある可能性があるが、結果に大きな支障

『少女画報』の投稿欄分析による読者と編集者の関係性の変容

をきたさないと考えられるため、今回は現存する頁数でのみ検証を行った。また大阪国際児童文学館に一月号が所蔵していなかった年は、最も一月号に近い月の号を選んだ。そのため一九二七（昭和二年）、一九三六（昭和十一年）は四月号、一九三二（昭和六年）年は三月号の総頁数とした。

この「表3」と前述の「表2」を比較すると、一九二〇年代の女学生人口の増加に合わせて、一九二三（昭和十二年）年と一九二五（大正十四）年では頁数が倍近く増加していることが見て取れる。また、一九三〇（昭和五年）年から一九三二（昭和七年）年にかけての百頁近くの減少などから、需要増加に合わせて多様化、細分化した少女雑誌市場の競争の激化が考えられる。

二節 創刊時の投書欄と規定

戦前の少女雑誌にとって読者投稿欄は欠かせないものだった。『少女画報』でも創刊号から募集がかけられ、翌月号には多くの投書が掲載されている。一九二二（明治四十五）年時点で読者が自分の文章を送ることができると投稿欄は主に「和歌」「作文欄」に加え、「口噺」「頓智問答」「文學遊戯」、そして「読者と記者」が存在した。刊行初期から存在している「和歌」と「作文欄」は毎号お題が定められ、それに即したものを創作する決まりになっている。その月の投稿欄の割合にもよるが、年を重ねるごとに作品の掲載数は増している印象を受ける。また、「頓智問

表3 『少女画報』の総頁推移

※ 1927年、1936年は4月号、1931年は3月号の総頁数とした。



答」も人気のあった投書欄のひとつで、創刊時における「頓智問答」は言葉遊びで面白おかしい問を作るといふ欄であった。例えば「兵たいとはどんな鯛か（横浜 花子）」（一九二二年四月号）^{（注3）}といったものや、「問・口が汀って怪我した薬 答・言譯（新潟 喜代子）」（同年同月号）、「問・煮え切らぬ返事を煮立てるには？答・側からたきつけ、るべし。（大阪 夕月）」（一九二二年十一月号）といった、問いに対する答えまでが掲載されるものも存在する。

一九二二（明治四十五）年二月号にて投書についての以下のような注意書きがなされているように、全ての欄が掲載されるわけではなく、月によって欄の有無も頁数も異なっていた。

投書の発表について

本誌の募集に對する應答や投書は、規定にもあります通りその月の五日を以てメ切ることにしてあります。これ最初編集局同人の考えでは、投書と云つても左程澤山もあるまい、審査と云つても速く済むだろう、さうすれば翌月の誌上に發票する方が諸嬢も好かろう。と云ふ所存でした。所が實際に當つて見て驚きました。毎日々々郵便脚夫の持つて来る種々の諸嬢御端書やお手紙は事實机上に山を爲すので、これを整理するさへ容易ではありません。況して之が全部を一兩日中に審査して印刷所に廻すと云ふことは如何に係の者が徹夜をしても間に合ひません。假令また間に合ふとしても、審査の疎漏を免れませんか、已むを得ず繪畫、習字の様な印刷に手数を要するものや、作文の如き審査に日数のかゝるもの、ある一部は一ヶ月を延べ充分なる審査をして翌々月の誌上に発表すること、致します。これ甚だ残念のことですが何卒諸嬢に於ても悪しからず思召しを願ひます。

こうした事情から毎号全ての欄を掲載することは不可能だったようだ。また、正確な数は定かではないが、相当量の投書が送られていたことが見受けられる。

▲投書は凡て少女諸嬢が自分で作った物でなければいけません。
▲作文の投書は一行二十字で二十行以内を原稿紙又は半紙に書いて下さい。

▲圖書と習字とは日本紙の薄いものに書くのです。寸法は半紙半分の縦六寸五分の野を引いて、その中に書くのです。

▲以上の外の投書は凡てハガキに書いて宜いのですが、鉛筆や色インキを使う又は住所姓名を明記していないもの、匿名のもの等は凡て無効とします。

▲投書の締切は毎月五日です。

▲各種の投書を一纏にして郵便で送る時は封筒に封をせず紙捲で一寸口を結って出せば三十匁までは二錢で参ります。但、その中に私用の手紙や切手を入れてはなりません。

▲宛名は「東京市麴町区飯田町四ノ四東京社少女畫報編輯所」として下さい。

▲賞品は當選発表の翌月上旬に送ります。

これは「投書の規定」として裏表紙に掲載されているものになる。全国の少女たちはこの規定を順守しつつ投書を行っていたわけである。賞品は「東京市橋区南傳馬町美術貴金屬細工商丸屋特製の少女畫報襟留ピン（純銀製）」が各投稿欄に規定の人数だけ贈呈される。

また多くの少女雑誌の投稿欄に見られたように『少女畫報』においても創刊当時よりペンネームの存在が確認できる。しかし「記者様投書は匿名でなくてはいけませんか（名古屋 雪子）」（一九一二年一月号）という投書に対し「いけません併し御本名を誌上に掲載するのは御差支あらば其旨を御通知あれば特に誌上だけは雅號を用ゐてもよいのですが記者迄には必ず住所學校名姓名を御知らせ下さい記者は飽までも秘密を守り無断にて他に洩らす様なことは致しません（記者）」と返答があるように、『少女畫報』においてはペンネームが必須ではなかったといえる。ペンネームの機能に関して、本田和子は「ペンネームとは彼女たちを日常の柵から束の間に解き放ち、憧れの女人像へと変身させる力ある呪文だった」とし、「彼女たちは少女雑誌の投稿者として筆を執ろうとする

とき、すでにして明治末期のどこその娘という「生身の現実」を無化している」（本田「二〇一二」一三六頁）と指摘した。しかしこの時期においてペンネームは奨励されておらず、こうした機能は後年の読者投稿欄上での私的なやりとりが盛んに行われる時期にのみ機能するものであるといえる。

三節 読者投稿欄における歴史の変遷

『少女畫報』の投稿欄における「読者と記者」（創刊時の名称）の欄を「読者と記者」期、「読者くらぶ」期、「サン・ルーム」期、「新体制」期の四つの時期に分割し、それぞれの特徴について分析することで、読者と編集者との関係がどう変わっていったのかを明らかにしていくとともに、『少女畫報』がどのような雑誌作りを目指したかについて考察を深めていきたい。

①「読者と記者」期

【一九一二年（明治四十五年）年一月号～一九一七年（大正六年）年四月号】
創刊当初にすでに存在した「読者と記者」の概要には「皆さんの見たこと、聞いたこと、感じたこと、分らぬこと、何でも御投書なさい。」とあり、雑誌の感想や編集局への質問など多様な投書が寄せられた。『鹿兒島の大館鶴子様』談話室などには別に文章も限ってはありますが、毎號集まつて来る数が非常に多いので自然、皆ながみな出るとはまゐりません。（一九一七年一月号）からわかるように、既定の範囲内であれば特に文章の制約は無く、少女たちは自由に投書できる場であったようで、それもまた多くの投書が寄せられていた理由であると考えられる。編集者が、少女たちの投書に対して一言ずつコメントをつけていくという形式であり、本稿では投書の性質を大きく四つに分類して、それらを紹介する。

まずひとつめは「今月号から愛読者になりました」という旨の投書。毎月こうした投書が数多く届くため、全文掲載は一部で、「左の方々から愛読者となられ御寄稿なされるとのお通知がありました。皆さんにご紹介します。」という文章の後、名前と出身地が列挙されるものがほと

『少女画報』の投稿欄分析による読者と編集者の関係性の変容

んどである。

つぎに二つめが前号や雑誌そのものの感想である。「前号の口絵夢二先生の絵は本当に奇麗でしたわね。あのはらくと木の葉の散る下に何か考へていらっしやる様な姉さんがほしいわどうぞお願いですの。(岐阜 初川光江)」「(一九二二年十一月)や「前号の口絵すつかり気に入りました。「軽井沢にて」その中でもよう御座いました「探偵女王」いよいよ面白くなりました。(名古屋 こう子)」「(同年同月)といった雑誌の表紙絵や小説を褒めるものが多いが、雑誌内の不満点やほかの投稿者への反論・持論などもたびたび見受けられ、そうした投書に対しては編集者がひとこと添えているのである。「▲八月號の表紙ほんとに好う御坐いますのねけれども四角の赤はなんだか厭でした一體毎號赤が多いようですが、もつとあつさりしたのになすつて下さいませんか。口絵皆気に入りました。(京橋 ふく子)」「(一九二二年九月号)や「▲前々號の本欄に神田の花の露さんは少女画報をもう少し程度を高くしてとのお言葉がありました私が私等は尋常三年ですからも少しやさしくして下さい。女学生さんには女学世界があるんですから・・・(信州 時鳥)」「(同年同月)などであり、内容に分け隔てなく掲載したスタイルが少女たちの自由な投書を助長したのではないかと考えている。

そして三つめが記者への質問だ。宛先の確認や、女学校の入学の仕方など、質問内容は多岐に渡る。以前答えた内容であっても、別の読者であれば掲載し返答している。毎号増え続ける新規愛読者に対しての配慮がうかがえる。

最後に四つめが「愛読者会」の開催を懇願するものである。『少女画報』の読者たちは、現実世界での読者同志の集まりを求めていた。初めて愛読者会の告知が行われたのは一九二二(明治四十五年)年四月号、「豫告本誌は来る五月を以て愛読者大会を開いて、楽しき一日を過したいと考えて、目下計画であります、委しいことは、次号の本誌で発表します。」と掲載された。また、同年九月には以下のような投書が掲載される。

▲名古屋の愛読者皆様！今度我川先生にお願ひして名古屋小會を開くことにしました。涼しい秋風の袂を拂つ頃、お懐かしい先生と

美しい皆様とのお話は、どんなに清く取り交はされるでせう。私は今思つてさへ一人は、笑まれます。尚委しいことは先生と御相談致します。あ、中京の未だ見ぬ皆様、何卒御賛成遊ばす様偏に御願ひします(千代子)

●千代子さんとこう子さんが御盡力下されて中京讀者會が出来さうです。私も何事を措いてもお邪魔に出る積りです。何卒名古屋の愛読者諸嬢は御賛成下さいまし。委しいことは十月の誌上でお知らせしますが、御賛成のお方は編輯局内我川宛で御申し越を願ひます。而すれば幹事の方に御通知して置きます(我川)

この名古屋愛読者会の様子は同年十一月号に写真とともに掲載され、大きな反響を呼んだ(図3)。以前より、編集局の方々の顔が見たいという投書が多かったため、彼らの容姿に関するたよりが倍増したほか、自分の地域でも愛読者会を開催してほしいという旨のたよりも今まで以上に多く寄せられるようになった。その後もたびたび愛読者会を東京、京阪神、名古屋などを中心に開催していたようだ。

少女雑誌の投稿欄における読者同志の繋がりを、本田和子は「少女幻想共同体」(本田「二〇二二」一三六頁)と呼び、川村邦光は「(オトメ共同体)」という(理想共同体)「(川村「一九九三」一一一頁)と呼んだ。これらは投稿欄上に存在する実態を持たないコミュニティであるとされている。それに加えて今田絵里香は『少女の友』における愛読者大会「友ちゃん会」の例を用いて『少女の友』の読者同志の繋がりは、(中略)もはや投稿欄という場所から抜け出し、現実の世界にまで広がっていく「少女ネットワーク」ともいふべき親密かつ広範なネットワークに発展していた」と結論付けている。『少女画報』における「愛読者会」も、この「少女ネットワーク」に達していると考えられる。しかしながら、『少女画報』の「読者と記者」上では読者同志の交流はそれほど盛んに行われている印象は受けないのである。その理由として編集局が誌上で読者同志の交流にあまり寛容的ではなかった可能性があげられる。「▲記者様へお願ひいたします少女世界や少女界のやうに読者が互ひに自由に



図2 1912年11月号より「名古屋愛読者小会」

※下図前列左から二番目の男性が編集主筆高橋我川氏。

話ができるように談話室をおこしらへくださいな(静岡県 西尾みゑ子)

●この事は何度もお断り申しした通り餘り必用を認めませぬから設けられませぬ。(一九一二年九月号)や「京都の貴世子様」談話室で読者同志がお話すると云ふことは間違の出来易いことでありますから餘りいたさないのです。(一九一七年一月号)などの投書への返答からわかるように、当時ほとんどの少女雑誌の読者投稿欄で見受けられた読者同士私的なやりとりに対して、『少女画報』編集局は決して寛容的とは言えなかった。実際、「読者と記者」欄上において他の投書に対する意見は掲載されても、読者同士の私的なやりとりや会話はほとんど見られない。私的なやりとりは頁数を割くこと、またそれらによって雑誌とは無関係な部分でトラブルが発生し、少女たちを巻き込むことを避けたのではないかと考えられる。またそうした投書を掲載しないことによって他雑誌との差別化を図る意図があった可能性も存在する。

創刊と同時に設立された読者編集者間のコミュニケーションの場は多くの投書によって賑わいを見せた。読者間の私的なやりとりはあまり見られないものの、誌上を超えて読者たちは交流を深めた。

②「読者くらぶ」期

【一九一七(大正六)年五月号～一九三〇(昭和五)年十二月号】

一九一七(大正六)年五月号から「読者と記者」の欄が「読者くらぶ」に改名される。「新しい愛読者」「前号の感想」「談話室」「お答えします」の見出しを作り、レイアウトが変更され読みやすくなったが、今までのような読者と編集との対話は少なくなった。「新しい愛読者」は前述の「今月号から新しい愛読者になりました」という旨の投書があった読者の名前と出身地をより多く羅列する場所になった。「前号の感想」は見出し通りではあるが、投書に対しての編集からのコメントがほとんど存在しない。編集からのコメント、質問に対する返答はほぼすべて「お答えします」に掲載されている。しかしながらここでは読者の質問内容は掲載されず、「○○(出身地)○○(名前)様○○○○(返答内容)」のような形式となっている。「談話室」はそれら以外の比較的自由的な投書が掲載された。しかしながら読者同士の私的なやりとりがほとんど無く、編集からのコメントも少なくなったため、投書が列挙されているばかりである。「読者と記者」期にみられたような読者と編集者の対等にも見える関係性がなくなり、掲載数は増えるがそのぶん簡素で淡々とした印象を受ける。これは読者のために掲載数を増やそうと試みた結果ではないかと考えられる。

しかしながら、その後一九二二(大正十一)年一月号の時点では「読者くらぶ」のレイアウトが変化しており、見出しは「暖かい握手(紹介)」「金のお部屋(画報的印象)」「銀のお部屋(第一談話室)」「鏡のお部屋(第二談話室)」「愛読者と記者」「花のお部屋(たより)」に変わっている。「暖かい握手」は新規愛読者の紹介。「金のお部屋」は雑誌の感想。「銀のお部屋」と「鏡のお部屋」は両方談話室となっているが、投書の方向性に違いがある。前者は読者全体への呼びかけや自己表現のとしての場であり、後者は編集者に宛てられた投書の掲載欄となっている。

「銀のお部屋」の特徴は「みなさま!もう秋も逝きますのねえ、そして又冷やかな冬がやつてまいります、何にもなし得ずに又一つ年をとるあゝたまらなく寂しうございますわ(神戸 植田禮子)」(一九二二年一月号)や「赫々たる太陽が輝いているうちは煙の都、その日の光が

彼方へ沈めば灯の都、この煙と灯の浪速にも若き乙女の血の燃ゆるうれしい春の音づれ初めました。大阪の皆様お振り下さいませ。(大阪四つ葉)(一九二二年五月号)のように、過剰なほどに詩的で情熱的な表現を使用し日常を装飾している点である。こうした過剰な表現は少女雑誌の投稿欄において頻繁に使用される。こうした文体の流行には一九二〇年代以降にみられる「エス」と呼ばれる少女同士の親密な関係が重要な役割を果たしていると考えられている。一九二六(大正十五)年四月号に掲載された「女学生隠し言葉辞典」によると「S(エス)」とは「sister」の頭文字。お姉さん、妹さん、等の意。主として妹に使用。以下説明省略」と記載されており、これは血縁関係にある姉妹関係のことを指すわけではなく、少女同士の情熱的で親密な関係を姉妹関係に例えた疑似的なものである。「エス」がこうした詩的で情熱的な文体の流行に影響を及ぼした要因は彼女たちの交流形態にある。「エス」は相手に対する想いを手紙によって伝達しあい、その際、より情熱的に自分の感情を表現する必要があったのだ。こうした「エス」の手紙による感情表現の文化が、当時流行していた少女小説などによって補強され、読者投稿欄上の自己表現の場において結実したと考えている。

「鏡の部屋」では編集者宛ての投書とそれに対する返答を掲載する「読者と記者」に近い形態をとっている。しかし以前までと大きく異なる点として「没籠の子」という架空のキャラクターが存在するという点である。詳しい設定などは不明だが、没になった(掲載されなかった)投書を食べる子供であるようだ。「ねえ没の子様一生のお願ですから今度こそ當選の國へ遊びに行かして下さいね、あなたはいつも私たちは知らないと思つてあまり食べ過ぎますよ。明日はお警者様の御やつかいですよ。(すみれ)(一九二二年七月号)などの「没籠の子」に対しての投書も多く、少女たちの間でも人気であった。少なくとも彼(または彼女の出現によって、読者である少女たちにとって投書の不掲載による失望感や軽減されたのではないか。また、その後一九二七(昭和二)年時点では「没籠の子」ではなく、「没子さん」として読者と同年代の少女が登場している。

投書に対し返答をする大人の男性である編集者は、読者である少女たちにとって自らを守護してくれる存在であった。しかしそれと同時に彼

らは「掲載を決定する権力を持ち、掲載形式・内容をあらかじめ制定する権力をもっている。すなわち、少女雑誌の言説空間において、少女雑誌の作り手である大人たちと少女たちの間には、圧倒的な権力の不均衡があったといえる。」(今田「二〇〇二」)こうした事実に対して、『少女画報』編集部は不掲載の理由付けを少女たちより低い年齢の子どもないし、同年代の少女に肩代わりさせることによって読者に自分の投書が不掲載になるストレスや無力感を軽減させる目的があったのではないかと考えられる。また、編集者に宛てた投書の言葉遣いと、「没籠の子(没子)」に宛てた投書の言葉遣いにも差が見られる。こうした取り組みは一九一七(大正六)年の段階で編集部が葛藤していた、多くの投書を掲載してあげたいという思いと、読者との対話へのこだわりに対するひとつの解答だったのではないかと考えている。読者に寄り添うことで、権力の不均衡性をほんの少し隠すことに成功したといえる。

「愛読者と記者」では編集者に宛てた投書というより現実的な質問が多い。投書規定の確認や進学のための相談などが該当する。欄は大きくはないが読者のためには必要なものであると思われる。

新しく追加された要素が「花のお部屋」である。説明として「(たより)となつているが、その実情は読者同士の私的なやり取りの場である。「釜出のさくら様、はるかか湘南の地より御君をお慕して居りますの。拙き者ですが、おさしつかえなくば、何卒誌上にて御交際をおゆるし下さいませ。返子の牧野静枝様、其後御病氣はいかゞですの? (八重櫻)」というように読者同士が投稿欄上で声を掛け合い、交流を深めるのである。しかし「読者と記者」期において寛容的ではなかった読者同士の私的なやり取りを大々的に掲載し始めたのはなぜか。私は「そういった欄を作つてほしいという意見が多かった」また、「私的な投書を投稿する読者が多かった」からではないかと考えている。しばしば行われる「愛読者大会」などにおいて読者間の交流は存在し、特定の読者に宛てた投書も度々掲載していた現状において、こうした読者間の私的なやり取りを行う投稿欄を設立することに抵抗は少なかったのではないか。こうした投稿欄の中でも特に人気の高かったのが、作文欄で秀逸な作文が掲載された読者や、魅力的な投書を投稿した読者などである。「米澤八重子様また見ぬ

君がみ名をよぶことをどうぞお許し下さい。ほんとうにお慕しう御座いますからかうした日が長いこと続いたんですが、拙い子はたゞ貴女様のお作に憧憬れて居りますの。おさしつかえなくばご住所を。清い御交わりを切望致します。(山形鈴木のお) (一九二二年四月号) や「米澤八重子様！早くから此の誌上でお慕ひ申して居りましたの、私も八重子と申しますの、何卒この縁をもちまして拙い子ではありますがどうかお交わりを：臥して止まない次第で御座居ます(東京 アマリ、ス) (一九二二年五月号) は、「米澤八重子」という人物に宛てて投稿されたものだ。この人物は作文欄にて幾度も名前を確認することができ、その号で最も秀逸な作文に贈られるとされる「特選」にも選ばれたことがある。文字によって構築される投稿欄上において、より美しく秀逸な文章で感情を表現できるということは何よりの魅力だったのだ。

一九一七(大正六)年に行つたレイアウト変更によって、より多くの投書を掲載するために読者とのコミュニケーションが減少した。編集部は掲載されない投書の多さに憂いていたのではないだろうか。それに対する解答が一九二二(大正十一)年の二度目のレイアウト変更だ。「自己表現・読者全体」「編集者」「特定の読者個人」と投書の宛先を分岐させることで、読者編集者間のコミュニケーションを損なうことなく、読者の自由な表現を実現させた。「没籠の子」なる架空のキャラクターによって不掲載による失望感を和らげ、読者同士の私的なやりとりの場を設けることで、『少女画報』の読者投稿欄は更なる盛り上がりを見せた。その結果一九二三(大正十二)年以降、『少女画報』の総頁数は大きく増加する(表3)。おそらくこの時期こそが『少女画報』の転換期であり、こうした読者投稿欄のレイアウト変化が大きな影響を及ぼしたといえる。

③「サン・ルーム」期

【一九三一(昭和六)年一月号～一九四〇(昭和十五年)年】

一九三〇(昭和五)年十二月号にて「此欄は次号よりフラワー・ルームと名を改めます。詳しいことは二五七頁の投書規定に就いて御覧下さい。」という文章とともに投稿欄の改名が明らかになる。その後一年間「フラワー・ルーム」として継続した後、一九三一(昭和七)年、「フラワー・ルー



図3 1932年1月号より「サン・ルーム」誌面

ム」は「サン・ルーム」へと改名され、レイアウトも一新される(図3)。投稿欄の概要には「親しい握手と 賑やかな談笑 あなたの方の サンルームに 靴音かろく 入つて下さい。」(一九三二年一月号)となっている。「フラワー・ルーム」以降、今までのような見出しは消失し、全文掲載する投書は「読者くらぶ」期における「金のお部屋」(雑誌の印象・感想「銀のお部屋」(自己表現・読者全体への呼びかけ)のものほとんどで、特定の個人に宛てた投書は「通信口」として省略されて掲載されている。

みづき貞子様、水江るみこ様——仙台の庄子さち子さまから御通信がありました。双葉純子さま——新潟、坂・HITOMIさまからお振い遊ばせとの御通信がありました双葉れい様——熊本春野美智子さまから宜しくとのこと。・・・(以下略)

(一九三二年一月号)

新規愛読者についても「新らしくルームをノックする人」として「通信口」と同じように頁の隅に掲載されているばかりであり、編集者からのコメントは全ての投書につけられているわけではない。一時は大々的に掲載していた読者同士の私的なやりとりや、読者編集者間のコミュニ

『少女画報』の投稿欄分析による読者と編集者の関係性の変容

ケーションが減少した理由については資料不足により断定することが出来なかった。この頃の頁数の減少や新泉社への発行元の変更などに原因の一端が存在するのではないかと考えており、深く考察を重ねるとともに今後の課題としたい。

ところが一九三七（昭和十二）年一月号において「サン・ルーム」はその内装を再び大きく変化させる（図4）。「少画サロン」、「ハッピーウイングス」という見出しを作り、それぞれ「少画サロン」は「少女画報」についての忌憚のない批評、感想、希望、意見等を（百五十文字以内）、「ハッピーウイングス」には「執筆諸先生、お友達、編集室等へのお便り（百五十文字以内）」を掲載した。また、「少画サロン」にはほぼ全ての投書に編集者のコメントが掲載されており、「ハッピーウイングス」でも編集者に宛てられた投書にはほぼ全てに返答が行われている。「サン・

ルーム」内に「青いノート」と呼ばれる編集者の文章が掲載される場が新設されているのも特徴的だ。こうした革新的なレイアウト変更の背景には発行元の変更が存在すると考えられている。東京社から新泉社に発行元が変更になり、編集方針に読者投稿欄の充実が加えられたことが予想される。一九三二（昭和七）年の「サン・ルーム」に

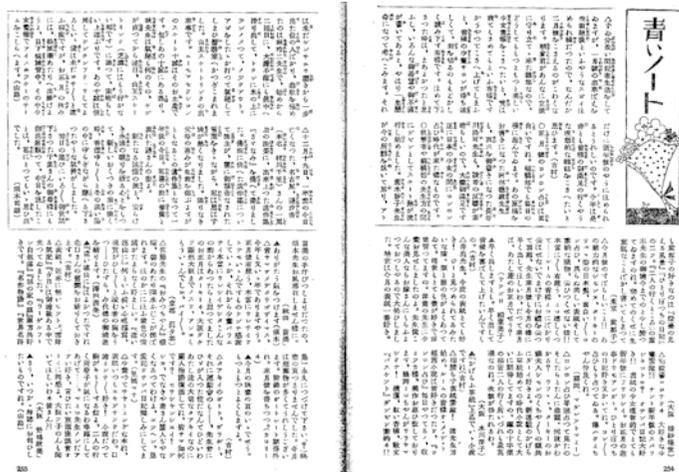


図4 1937年2月号より

下部「サン・ルーム」および上部「青いノート」欄

充てられている頁数が一月あたり平均して約五〜六頁であるのに対し、一九三七（昭和十二）年以降は平均して十四〜十六頁と大幅に増量していることから明らかだ。雑誌全体の頁数も増量しており、一九三二（昭和七）年までは年々下がり続けていた総頁数が増え続け、一九三七（昭和十二）年には過去最高にまで登る。一九三二（昭和七年）年の一月号と一九三七（昭和十二）年の一月号を比較すると百頁近くも差があることがわかる（表3）。今田絵里香は『少女の友』の全盛期が一九三〇年代であるとしたうえで、この時代について、「雑誌の影響が強大かつ広範になっていくとともに、雑誌のほうでも激化する出版社同士の競争に勝つために躍起になっていた」（今田「二〇〇七」一三七頁）としている。『少女画報』の新泉社への発行元変更や読者投稿欄の充実が競争に勝つための戦略であり、その目論見は成功したといえる。しかしその後、第二次世界大戦の開戦とともに、国全体が総力戦に突入していく中で、雑誌全体の頁数は徐々に減少していくことになる。

「サン・ルーム」期と称した一九三〇年代は『少女画報』にとってもまさに激動の時期であった。加速する少女雑誌市場の競争の中で読者同士の私的なやりとりの掲載を抑制した『少女画報』は徐々に頁数を減らしていくことになる。この頃、より良い読者投稿欄を模索してレイアウトの変更を続けたのではないかと考えている。その後発行元を新泉社に変更し、読者投稿欄を重視した編集方針へと切り替え、その頁数は驚異のV字回復を果たした。

④「新体制」期

【一九四一（昭和十六）年十月号〜一九四二（昭和十七）年一月号】
戦争の時勢は少女雑誌『少女画報』においても色濃く鑑みることができ。一九四一（昭和十六）年十月号では「サンルーム・新体制」と名前が変わり、その概要は以下のように掲載されている。

サンルームは皆さんの楽しい、そして真面目なお話をする談話室です。このお部屋にはいつも明るい日光と、清潔な空気をいれて、少女らしい純真さと慎ましい態度でいろいろなお話をいたしませう。

餘りに無益なオシヤベリや意味のないお便りは、かへつて自分自身の身を傷つけるだけのものです。どうか正しい言葉づかひで、まじめな感想や意義のある生活の報告をお聞かせください。少晝に掲載された作品批評等も大いに歓迎します。こおルームが浄化されて更に高く立派なものになるかどうかはみなさんのお便りの如何によつて決定される譯です。

(一九四一年十月号)

一九三〇年代の「サン・ルーム」の「賑やかな談笑」に対して、「正しい言葉づかひや意義のある生活の報告」を目的とする点、「かへつて自分自身の身を傷つけるだけのものです」といった文章が特徴的だ。掲載される投書も詩的で情熱的なものはほとんど見られなくなり、「読後生活報告感激し乍ら拝見いたしました。働いていらつしやる方々の生き甲斐ある御生活御羨ましく存じます。リ、姉様、今度は家事にたづさはつていらつしやる御友達の合理化された御生活を伺ひ度いと思ひますが如何でせうか(東京 葉隠露子)」「一九四一年十月号」などの読後としての女性や子供を意識したものが多く見受けられる。読者である少女たちにとって読者投稿欄は、同年代の少女たちの投書に触発され、愛国主義的な思想を深める場としても機能していたように見える。殆どは「読者投稿欄」という少女たちの交流の場はお互いに愛国精神を高揚する場と変化とし、少女たちは意識的にか無意識にか「読後」の担い手となった」と結論付けている(殆ど「二〇〇六」)。

付録もきれいなものが出来ていましたが、どの雑誌も毎年同じやうなものをつけてゐる有様ですし、それ付録をつけるとどうしても値上げしなければなりません。翻つて考へてみると、国家非常時、国民精神総動員の折から、むしろ付録を全廃しその上値下げ、その額を皆様の国防献金にあてたらと、いふことに編輯部一同の意見が一致したのです。

(一九三八年一月号)

これは一九三八(昭和十三)年一月号の編集部便りに掲載された文章であり、紙などの資源高騰により付録の全廃に踏み切ったことが記載されている。また全体の頁数の減少に伴い読者投稿欄に充てられる頁数も六頁程度に減少している。「夕波千鳥様、由解筐子様方のお説賛成です。私建のルームをもつとく立派に有益なものにしようではありませんか! いろいろ／＼な本の読後感等も発表しては如何でせう。無理なお願ひですがサン・ルームの頁もつとまして下さいませんか(静岡 天城純子)」「一九四二年一月号」など、頁増量を望む声もあったようではあるが、「どうぞ御発表下さい。紙量統制の折柄、止むを得ず減りました。この意味でもこの御部屋を無駄のないものにしていただき度いとお願ひいたします。」とのように国全体の資源不足によって雑誌の存続そのものが苦しい現状だったことが読み取れる。その後『少女画報』は一九四二(昭和十七)年内に雑誌統合令によって『少女の友』と統合という形で廃刊となる。

一九四〇年代の『少女画報』編集部は軍国主義・愛国主義の時流のなかで雑誌存続に精一杯であったように見える。それでもなお「サンルーム・新體制」として読者投稿欄を存続させ続けたのは読者のことを第一に考えていたからであろう。なお大阪国際児童文学館には一九四二(昭和十七)年二月号までの所蔵しなく、二月号の時点では次号から合併するなどの告知は見られなかったことから、廃刊はもう少し後であると考えている。またその後の刊については十分な検証が行えていないため、統合直前の号の誌上や、合併後の『少女の友』の誌上には検証の余地があると考えている。

第四章 結びに代えて

本稿ではここまで「少女画報」の読者投稿欄の歴史の変遷を辿り、読者間および読者編集者間のコミュニケーションの変化について考察を行った。一九二一(明治四五)年に創刊した『少女画報』は常に読者の事を考え、一方的になりがちな読者編集者間の立場を均衡に保ち、よき友人となれる

『少女画報』の投稿欄分析による読者と編集者の関係性の変容

ような雑誌を目指した。またその読者層は高等女学生に留まらず尋常小学生にまで及び、低年齢層にも楽しめるような誌面作りを行った。

創刊当時から存在した「読者と記者」欄は読者と編集者が交流を行うことのできる読者投稿欄であった。編集者と読者との絆が深まっていくと同時に、編集部は毎月大量に送られてくる投書の多くが不掲載となることに憂いていた。その結果が一九一七（大正六）年に改名した「読者くらぶ」である。読者と編集者とのコミュニケーションを減らす代わりにより多くの投書を掲載することが可能になった。しかしながら読者同士の誌上交際のほとんどなかった当時の『少女画報』において、ただ投書が列挙される読者投稿欄は少し寂しくもみえた。その後一九二二（大正一一）年には「読者くらぶ」のレイアウトを一新。読者と編集者のコミュニケーションを実現しながらも、読者である少女たちの自己表現の場としての読者投稿欄作りにも成功した。また、かねてより希望の多かった読者同士の私的なやりとりの場を実現させることで『少女画報』はさらに飛躍する。女学生が爆発的に増加した一九二〇年代にこうした革新を行うことで、頁数も大きく増加させた。しかし一九三二（昭和七）年には「読者くらぶ」を「サン・ルーム」に改名し、誌上での読者間および読者編集者間の交流の掲載を大きく減らし、これにより頁数の減少を招くこととなる。その後発行元を東京社から新泉社に移し、読者投稿欄の充実に努め、頁数は驚異的な増加を辿った。一九四〇（昭和一五）年を過ぎると、太平洋戦争による総力戦の影響が少女雑誌にも表れる。紙資源の高騰や軍国主義的思想によって『少女画報』はその存続が苦しくなっていく。その後一九四二（昭和一七）年に雑誌統合令によって『少女画報』は『少女の友』に統合という形で三〇年という生涯に終焉を迎えた。

本稿で明らかにしたのは『少女画報』の読者投稿欄における歴史的变化である。『少女画報』編集部は「発刊のことは」にあるように常に読者にとって「益友」となれるよう尽力してきた。読者投稿欄の盛り上がりは少なからず、雑誌全体の頁数や売上、人気に影響を及ぼしたと考えられる。雑誌の編集部は投書の掲載・不掲載を選定し、掲載の形式や内容についても決定する権力がある。それはすなわち読者である少女たちが得られる情報をコントロールする権利でもあったはずだ。少女雑誌の

読者投稿欄分析において、編集部について考察を深めることは、読者である少女たちが与えられた情報や価値観に密接に関わっているという点に注目すべきである。私は考えている。

今田絵里香の指摘するように『少女画報』と『少女の友』は共通する紙面作りを行っていたと考えている。故に『少女画報』は『少女の友』に統合という形になったのだと予想される。しかしながら創刊初期においては両雑誌に明確な差異が見られる。多くの少女雑誌の読者投稿欄でみられた少女同士の私的なやりとりに対して『少女画報』はあまり寛容的ではなかった。しかし読者が主催する愛読者会は認め、現実世界における読者間の交流を推奨した。『少女画報』の読者である少女たちは、読者投稿欄上での交流より前に現実世界でのコミュニケーションを形成していたといえる。これらは今田の指摘する「少女ネットワーク」の成立過程とは異なる事例である。「少女ネットワーク」は投稿欄上にて形成され、「投稿欄」という場所から抜け出し、現実の世界にまで広がっていく（今田「二〇〇七」一五三頁）ネットワークであるからだ。こうした点から、少なくとも創刊初期の読者投稿欄上においては『少女画報』と『少女の友』には明確な違いがあったと結論づける。

今後は、本稿で得られた知見をもとに、発行元が東京社から新泉社に変更になった経緯と一九三二（昭和七）年前後の読者投稿欄の分析を行うとともに、史料不足のため十分な検証が行えなかった一九四二（昭和一七）年の『少女画報』における『少女の友』との統合までの経緯を辿り、明らかにしていくことを課題としたい。また、今回の研究で目を通すことのできなかつた研究内容などにも目を通し、新しい視座を獲得することで、より一層考察を深めていきたい。

注

1 「企業物価指数（国内企業物価指数）」は国内において企業同士で取引される「財（モノ）」の価格を、「消費者物価指数」は小売段階における「財」と「サービス」両方の価格を対象としている点で、モ

ノサシの種類が異なります。

また、同じ「企業物価指数」でも、明治時代までさかのぼれる「戦前基準指数」は、国内品（国内で生産され、国内向けに出荷された商品）だけでなく、輸出品、輸入品も含む概念であるため、その動きには、海外需要の増加による輸出品価格の上昇など、国内要因以外の様々な要因が反映されています。

「日本銀行「企業物価指数」と「消費者物価指数」の違いについて」より引用。

- 2 本稿では『少女画報』本誌から抜粋する場合、タイプミスや印刷ミス等に関しても原文通り抜粋するものとする。
- 3 本稿では引用する文章に（〇〇年〇号）と記載がある場合『少女画報』の投稿欄からの引用である。
- 4 一九一二（明治四十五）年一〇月号は大阪国際児童文学館に所蔵が無く「名古屋愛読者会」の詳細な予告が調査できなかったため、本稿では愛読者会開催の報告から分析を試みている。

【参考雑誌・参考文献】

- ・『少女画報』東京社。
- ・今田絵里香（二〇〇七）『少女』の社会史『勁草書房』
- （二〇〇二）「少女雑誌における「少女ネットワーク」の成立と解体―1931～1945年の少女雑誌投稿欄分析を中心に―」、『教育社会学研究』（七〇）、一八五―二〇二頁。
- （二〇〇一）「近代家族と「少女」の国民化―少女雑誌「少女の友」分析から―」、『教育社会学研究』（六八）、一二五―一二四頁。
- ・香川由紀子（二〇〇三）「女学生の絆―明治二十年代の『女学雑誌』掲載小説を通して―」、『言葉と文化』（九）、八九―一〇三頁。

（二〇〇五）「女学生のイメージ―表現する言葉の移り変わり―」、『言葉と文化』（二〇）、五三―七〇頁。

・川村邦光（一九九三）『オトメの祈り 近代女性イメージの誕生』紀伊國屋書店。

・嵯峨景子（二〇一一）『「女学世界」にみる読者共同体の成立過程とその変容―大正期における「ロマンティック」な共同体の生成と衰退を中心に―』、『マス・コミュニケーション研究』（七八）、一二九―一四七頁。

・鈴木沙也夏（二〇一三）『個人レポート「乙女の港」における挿絵の役割と効果―女学生文化の視点から―』、『研究ノート』（四一）、日本女子大学国語国文学会、三七―四二頁。

・田中卓也（二〇一三）『近代少女雑誌「少女界」の読者に関する研究―投稿欄「女子談話会」の投書を中心に―』、『越谷保育専門学校研究紀要』（二）、一〇―一七頁。

・徳永保 ほか作成

（二〇一一）「我が国の学校教育制度の歴史について（『学制百年史』等より）」、国立教育政策研究所。

・豊田千明（二〇一一）「昭和女子大学図書館蔵『少女画報』解題と目次（上）」、『学苑』（八四五）、昭和女子大学近代文化研究所、七二―九五頁。

・裕 夕 記（二〇〇六）『アジア・太平洋戦争期の「少女の友」―読者投稿欄の分析を中心に―』、『大阪人権博物館紀要』（九）、一二五―一三九頁。

・郷 韻（二〇一七）『「乙女の港」における少女表象』、『多元文化』（二七）、四五―五九頁。